

祭りとおそれおののいて、鎮魂の祭祀を始めたりであるう。

さらに、石祠の建っている位置が、城下から蒲江に通ずる道の、谷川村から通称「ウダキの渡瀬」を渡って、山口村に入るところを掘っているのを考へると、これが悪風・悪疫を防ぐ「塞の神」としての性質を兼ねているようである。

昔の人の素朴な祈りによって始められ、長い間続いて来た「お籠り」の行事も、次第にすたれていくという。由未と語って下さった後藤老人も、「やがては縁故者だけで祀ることになるだろう」と、さびしげに語られていた。そうなるかも知れない。

五穀成就稼について、当時の人々と、今に生き、る者の価値観のちがいもあるし、殊に現代のように、何事も科学的に説明できなければ信じない風潮の中では、忌まわしい盗伐事件も、平和な山里を恐怖の底におとし入れた血なまぐさい処刑のことも、そしてその後には始まった鎮魂の祈りも、時の流れとともに忘れられるのが宿命かも知れない。(おわり)

『蒲江町史』

脱稿—出版近し

(祥栄)

昭和四十二年二月、県南随一の水産業地蒲江町は、町史編纂のことに決した。直ちにその編纂委員会が設立し、私に招かれてその編集主任となり、去る五月末凡てを脱稿、印刷にかかり八月中に発行と決定した。佐伯町史に次ぎ、南都八ヶ所村では最初のことである。A5判本文七〇〇ページ、佐伯町史と同型、東京炊ぎようせい印刷所格一冊三、〇〇〇円(送料別別二〇〇円)と代金は配本以後振替で申し込度育中、電報で申し込下さい。取扱所：佐伯史談会

証録

西南の後百周年二話

ハ第一話

水辻一等兵の遺族ら墓塚に見えらる

昨年秋佐伯史談会日、佐伯招魂所(岡谷陸軍墓地)で西南の役戦没者百年忌墓前祭を営みました。そして遺族の参拝は、全くないものと思っていていましたが、先月思いがけず北九州市門司区から、遺族水辻久氏、親戚の古門忠夫氏外三名の婦人連の参拝を迎えました。走り梅雨のそぼ降る中を、加藤・羽柴両名ご案内申しました。ご持参の香筆、数々のご供物を備えてのご参拝、雨に半ばぬれて、まことに感銘ふかいものがありました。一偶然古文書を発見し、はじめて佐伯の墓地のことがわかり、はじめての参拝だそうでありました。

要点の古文書の中に、水辻一等兵の戦死公報がありましたので、その写しをお目にかけますよう。

福岡県豊前国第五大及二小及弓師村士族

警備隊 第陸審小隊

一等兵 水辻吉次郎

右鹿児島県賊徒征討二付 明治十年八月六日大分県下第四大五二十二小大辰越蛇葛山進撃之際重傷ヲ受ケ即死致候間 同県下佐伯城山陸軍埋葬地ニ埋葬 發候也

明治十年八月十二日

警備隊司令代理 陸軍少尉 徳永景孝

水辺一帯兵の墓は、招魂所入口に立せ、兵卒の墓石から数え十三列（左から三列目）一番手前に立っている。（調査書の方には本比吉之助と誤って書かれている）出身は築城郡弓師村、旧望津藩の士族で、官軍の兵力増強のための徵募士族隊「警備隊」に属してました。そして八月六日、大原越蛇山で戦死、二十二名の中に加わったのであつた。その戦況については佐伯史談百七号巻頭の、柴浦氏の文章と参照して下さい。

（付）招魂所は現在国有地、早く佐伯市に松下げさうけ、佐伯市指定史跡として愛護・管理をはかるべきです。尚、今春植えた苗木の根はよく活着しています。

八第二話

三重史談会は戦没者の慰霊碑を建設し、その除幕式と慰霊祭が執行された。

去る六月十二日、三重町史談会と同町大原園体記念公園の一角に、西南役百周年記念事業として、壮大な慰霊碑と建設した。

現地は、明治十年五月三十一日の三重市の激戦地のすぐ近く、六月十七



日の争奪戦の三回峠を越るか南方の空に望む丘陵の一角、眼の下には三重町の市街が展開している。

私は招かれて、西南役戦没者遺族弥生町床木の高司弘氏と同行、つぎさぐさべへ行

事に戦没者のつれづれを参加することが出来た。

因縁三重歌に着く幸窓、右手に見える公園の中、激戦地を示す巨大な標柱と、慰霊碑がま近かになみられる。

午前十時、ママさんグループのコーラスによって戻った。三回峠の古戦場を平った田吹繁子女史の歌、兵あまた命すてたるこの丘はいま秋草の

花に埋もれる

（歌碑は三回峠に建てられている）

この歌声につれて除幕が、宛玉建設委員長と高司遺族の手によって行なわれた。自然石の立派なものである。

つづいて慰霊の法要が、西南役当時当時官軍の野戦病院であつた、丈六寺金山住職と導師として執行、参列者一同焼香、戦没者の冥福を祈った。そして経過報告があつた後、会場が教育会館ホールに移された。

宛玉建設委員長のあいさつにつづく来賓祝辞にあたり、えられるままに私も所感を述べ、三重町史談会の不朽の歴史顕彰事業を賞讃した。

弥生町床木出身の戦没者高司幸太郎の弟は、慰霊碑の台座にはつきりと記され、慰霊高司弘氏はその除幕までしたことを、感激をもち謝辞を述べた。

引続いて大分大原豊田教授の記念講演があつた。それは明治維新という大動乱を経て、日本が近代国家として生れ変わり、しかも士族支配の社会体制が崩壊し、自由民権の民主社会へとつたかおつた、いふは明治維新の終結を告げたものである——と、そのようなことと、わかり易く話して下さった。

講演が終つて、下ぎゆかお祝宴がはじまつたが、私は凡ての企画より進め、進行係をひとめられた幹事上野重男氏の、並々ならぬ配慮ご努力に、只々敬服するばかりであつた。